修士論文（要旨）
2009 年 1 月

中高齢者のライフ・キャリア トランジションに関する質的研究

指導　柴田　　博 教授

国際学研究科
老年学専攻
207J6018
矢吹 孝彦

目　次

第4章　序章

第１節 問題意識・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

１-１中高齢者を取り巻く現況と研究の意義

１-２先行研究と課題

第２節 用語の定義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６

２-１中高齢者とは

２-２ライフ・キャリア トランジションとは

２-３ライフ・キャリアにおける役割とは

第３節 研究目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６

第3章　研究方法

第１節 研究デザイン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７

第２節 研究の手順・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７

２-１研究協力者

２-２データ収集方法・期間

２-３分析方法

２-４倫理的配慮

２-５確実性と妥当性

第2章　本論

第１節 分析過程と概念形成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９

第２節 カテゴリー作成と結果図の生成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０

第３節 分析結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１

第４節 事例分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２３

第1章　考察

第１節 考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２８

第２節 結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３２

第３節 今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３４

引用文献

Ⅰ．問題意識

超高齢･少子時代を迎えるわが国においては、高齢者の『生き生き人生への主体的な取り組み』と社会全体への活性化へいかにしてつなげていくかが問われている。一方、中高齢者が節目において次のステージへの『移行』がスムーズにいかないという問題が生じている。人生８０・９０年といわれる今日、まだ先のあるライフ・キャリアにおいて、中高齢者がこれからの高齢社会に活路を見出し、また、世代間のパイプ役として生き抜いていくことは、一つの時代の要請であろう。したがい、中高齢者個々人が自身のライフ・キャリの「節目」をしっかりと見据えていくことは、今日的課題の一つであり、さまざまな高齢者の経験などを基にした質的研究は有意義であると考える。

Ⅱ．研究目的

本研究では、中高齢者のライフ・キャリアトランジションという主観的なテーマの質的な側面を理解するために、高齢者が中高齢期の節目にどのような葛藤・悩みなどをのり越えてきているのか、“移行”に関するライフレビューの事例などから、共通する概念生成を試みることを目的とした。

Ⅲ．研究方法

１．研究協力者：協力者は現在も就労している、また年金生活者で、何らかの役割活動を続けている６５歳以上の男性高齢者９名（65 歳～73 歳、平均年齢 67.8 歳）である。

２．データ収集・期間：面接は１人、1～2 回、1 回 1 時間～1 時間半前後で、2008 年 8 月下旬～11 月中旬の約 3 ケ月で実施した。面接は半構造化インタビューで行われた。

３．分析方法：質的調査の研究方法の中でインタビューデーターに即した形で概念生成に適したグラウンデッド・セオリー・アプローチで、木下（2007）が提唱している修正版のＭ－ＧＴＡを採用し、その手順に準拠して分析を進めた。

Ⅳ．結果および考察・結論

分析テーマは、中高齢期での「転機」のプロセスとした。分析テーマに照らしてデータの関連個所に着目し概念生成を行い、概念間の関係からカテゴリーを作成した。本研究では、13 回のインタビュー面接データの分析の結果、１８の概念からなり、６つのカテゴリーが生成された。先ず、「トランジション」の受容のプロセスとして、《仕事生活での転機》《市場環境の変化と役割交代の認識》があげられた。中高齢期のキャリア トランジションの第１段階と言える。つまり、直前までの仕事体験（成功体験が多い）やその習慣が自分のなかにいつまでも存在している。次に「学び」のプロセスでは、２つのカテゴリーは、《成長への体験》と《気づき》であった。他には、《定年後のライフ・キャリア》および《自己責任の自覚》の概念が生成された。高齢者の語りからは、ある程度の時代性や環境の違いは否めないが、高齢化や市場環境の変化は今日の日本の社会に共通するものであり、高齢者が中高齢期の節目で経験した『移行』は本質的に異なるものではないと考える。その意味では、一側面を描き出せたのではないかと考える。節目で『ライフ・キャリア』をしっかりデザインすることは、トランジションをスムーズに乗り越える鍵になるものと考える。

【引用文献】

Baltes, P.B. et al. New perspectives on the development of intelligence in adulthood: Toward a dual process conception and a model of selective optimization with compensation. In P.B. Baltes & O.G. Brim, Jr. (Eds.), Life-span Development and Behavior, Vol.6, 33-76 Academic Press,1984

Bridges W. (1980),Transitions: Making sense of life’s Changes, Reading, Addison-Wesley. (倉光 修・小林哲郎（訳）『トランジション-人生の転機』創元社 1994)

Collin, A., and Young R.A. (1986), “New Directions for Theories of Career ,” Human Relations,Vol.39,No.9:PP.837-853.

Erikson, E.H.,1950 Childhood and society,2nd ed., W.W. Norton,& Co. (仁科弥生（訳）『幼児期と社会』上･下 みすず書房 1999)

Erikson, E.H.,J.M&Kivnick,H.Q.：Vital Involvement in Old Age. N.Y.：W.W. Norton,1986（朝長正徳・朝長梨枝子訳『老年期 生き生きしたかかわりあい』みすず書房 2005)

エリクソン,E.H. 村瀬孝雄・近藤邦夫（訳）『ライフサイクル,その完結』みすず書房 1989

Havighust,R.J.1953 Human development and education, Longmans, (沖原豊・掃除正子訳『人間の発達課題と教育』玉川大学出版部 1995)

金井壽宏「キャリア・トランジションの展開―節目のキャリア・デザインの理論的・実践的基礎―」『国民経済雑誌』第 184 巻第 6 号,43－66 頁 2001

金井壽宏『働くひとのためのキャリア・デザイン』 ＰＨＰ研究所 2002

金井壽宏『仕事で「一皮むける」関経連「一皮むけた経験に学ぶ』光文社 2002

加藤一郎『語りとしてのキャリア』白桃書房 2004

小嶋秀夫・やまだようこ 編 『生涯発達心理学』放送大学教育振興会 2005

Merton, R.K.(1967), “On Sociological Theories of the Middle Range, in R.K. Merton, On Theoretical Sociology: Five Essays, Old and New, The Free Press.(森好夫訳「中範囲の社会学理論」森東吾・森好夫・金沢実訳『社会理論と機能』青木出版 1969)

宮城まり子「ライフキャリアの開発とキャリアカウンセリング―生涯発達心理学の視点より―」『組織科学 第 33 巻』第 2 号,14－22 頁 1999

宮城まり子「人生 90 年時代のライフキャリアデザイン」 『明治安田生活福祉研究所 クォータリー生活福祉研究』 通巻 58 Vol.15 No.2 2006

宮城まり子『キャリアカウンセリング』 駿河台出版社 2002

長田久雄「人生 80 年時代に円熟期を如何に過ごすか」『明治安田生活福祉研究所 クォータリー生活福祉研究』 通巻 62 Vol.16 No.2 2007

柴田博「２１世紀の高齢者像」『 学士会会報』 N0.828 2000

杉澤秀博・柴田博 「職業からの引退への適応－定年退職に着目して－ 」『生きがい研究』12：73-96. 長寿社会開発センター 2006

高橋恵子・波多野誼余夫『生涯発達の心理学』 岩波新書 2002